

埼玉県比企地方の食生活史に関する一考察
 一『大々御神楽御講中献立』の分析を通して一
 都立立川短大 ○石川尚子

目的 地方の時代といわれる今日、各地での食生活研究が盛んに行われているが、研究を進めるにあたっては、歴史的視点、文化的視点を重視しつつ、庶民が実際に体験・実践していた生活そのものを取りあげて取りくむ必要性を痛感する。

本研究は、江戸時代後期から明治時代前期にかけて、幕府天領であった一農村に、どのような食生活があったのか、それが人々の生き方や食文化の発展にどのようにかかわっていたのかを、旧家に埋もれていた文書や民俗調査などから検討しようとしたものである。

方法 埼玉県比企郡鳩山町の根岸家が所蔵していた『大々御神楽御講中献立』（明治21年）記載の献立を解読し、出現する食品および献立を抽出、分析した。また、比企地方各地に残されている『伊勢講道中日記』から、当時の旅の実態、食品、料理の伝播経路などについても検討する。あわせて、『講中献立』と当地方の日常食・ハレ食の献立とを比較することによって、伊勢講での食事が持つ意味づけについても考察を試みた。

結果 合計11の食事記録から、出現食品を採録した結果、食品数77種類、出現回数125回であった。そのうち海産魚介類は19種類、36回に及んでいる。献立内容も、「鯿さしみ」「海老船盛」などの海魚料理や「式正御膳」が登場するなど、当時の比企地方の食生活とかなりかけ離れたものであった。こうした食品や料理の特徴、食文化の伝播、庶民の食を通してみえる生きる姿勢などについて一定の知見を得たので報告する。